The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	気づきにくい学習者／母語話者間のミスコミュニケーション : V-テミル と韓国語V-boda、タイ語lɔɔŋ-V-duu、クメール語sa:k-V-mə̀:l との対照
Author(s)	金谷, 由美子; プーンウォンプラサート, タニット; クイ, シェンキアン 他
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 157-176
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73704
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

気づきにくい学習者／母語話者間のミスコミュニケーション
ーV-テミル と韓国語 V-boda、タイ語 lɔ̀ɔŋ-V-duu、クメール語 saːk-V-mə̀ːl との対照ー

金谷由美子、プーンウォンプラサート・タニット、
クイ・シェンキアン、バーンセン・ピシャモン

0. はじめに

英語の試行形式のひとつである try to V と V-テミルの違いを見られたい。

（1）　“I tried to eat *chou doufu* yesterday…（but I couldn’t.）”
（2）　「昨日臭豆腐食べてみた。…（結構おいしかったよ。）」

過去のできごとについて、これら試行形式が使用された場合、（1）では「食べようとしたけれど、食べられなかった」という「含み」が伝わる[i]。一方、（2）では、「食べたこと」が伝わり、さらに、その結果に関するコメントなりエピソードなりが話題として継続することが予想される。これらの「含み」の違いは、形式に明示的に表れる意味ではないため、目標言語のインプットが限られている初級～中級の学習者は、教えられなければ気づきにくい。本稿は、tried to V と V-テミタの差に見られるような、意味的に母語の形式と重なる目標言語の形式が持つ「含み」が学習者に共有されていないことが、第二言語習得にもたらす影響に注目した。なお、本稿では、V-テミルという形式が使用された際に、明示的ではないが聞き手に伝わるもののうち、言語形式自体から伝わると考えられるもの（文脈に影響を受けないという意味ではない）を形式の持つ「含み」と呼ぶ[ii]。V-テミルにも、完全にコード化されているとまでは言えないが、文脈だけに左右されるとも言えない中途段階のような意味があり、コード化された意味よりもはるかに習得が難しいと考えられる。

V-テミルは単に《試行》を表すだけでなく、指示・依頼・提案における緩衝表現としての役割、控えめな意志表示、空想的な願望表示、婉曲的な断り、会話の展開ストラテジーとしての前置き等の様々な談話機能を持つ。また、出現形式によって、異なる意味や「含み」を持っている。ところが、日本語教育において、V-テミルは初級段階で《試行》を表す形式として「～てみてください」「～てみよう」「～てみたい」等の指示・依頼文、意向形、願望形で導入された後は、教室でほとんど触れられていないという実態がある[iii]。多くの言語に試行形式が存在するため、導入段階では学習者も教師もその難しさに気がつきにくいと思われ、今まであまり問題にされてこなかった。V-テミルを誤用分析及び対照研究のテーマとして扱った研究も管見では僅かである（生越 1991、山崎 2017）。

1．本稿の目的

そこで、本稿では、視覚動詞が文法化[iv]し、試行形式として存在する韓国語、タイ語、クメール語の母語話者が、無意識に母語の類似形式（韓国語 V-boda、タイ語 lɔɔŋ-V-duu、クメール語 saːk-V-mə̀ːl）の持つ「含み」を目標言語である日本語の V-テミル形式に転移することによって、誤用のみならず非用やミスコミュニケーションが起きている現状を紹介し、第二言語習得の語用論的側面においても対照研究による分析が有効であることを主張する。

もちろん、母語の転移だけで学習者が習得上直面する困難をすべて説明できるわけではない。近年、中間言語 という概念のもと、第二言語習得研究の分野では、過剰一般化、教授法やインプット環境等の影響に注目する研究が増えた。それに伴い、目標言語と母語の差異を根拠とする誤用分析研究は時代遅れとの見方が広がった。その一方で、母語の転移が第二言語習得に影響を与える大きな要素であることは、多くの研究者が認めるところであり[v]、母語の知識を活かした日本語教育の試みも見られる（庵 2017）。中間言語語用論[vi]の分野でも、母語の語用論的転移の研究に関心が寄せられており（清水 2009）、本稿も形式の持つ「含み」に関して母語の影響が思いの外大きいという事実を紹介するものである。

母語と目標言語の類似形式の持つ語用論的効力（pragmatic force）の違いが不適切な転移を引き起こす場合があることは、Thomas（1983）でも既に指摘されている[vii]。Thomas（1983）は、ロシア語母語話者の of course の過剰使用を例に挙げ、英語母語話者との間でミスコミュニケーションが生じる場合があることを紹介している。（3）“Is it a good restaurant? - Of course.” のようなやりとりにおける“of course”は、「当たり前でしょ（What a stupid question!）」のような「含み」を持つが、ロシア語母語話者は of course に該当するロシア語 konesno が意味する「積極的な肯定」を of course に転移しているだけなのだと言う。Thomas（1983）は、（3）のような誤用例を、母語の類似形式の持つ語用論的効力を目標言語に転移したことによって引き起こされる「語用言語学的失敗（pragma-linguistic failure）」であるとし、「社会語用論的失敗（socio-pragmatic failure）」[viii]から区別すべきであると主張した。後者は、言語の社会文化的な側面、即ち、ある状況においてどのような言語行動をとるべきかという社会規範に関わるものであり、安易な指導は目標言語の文化を学習者の文化より優位に置いてしまう危険性をはらんでいるため、教師は慎重であらねばならないと言う。

日本語教育においては、近年、異文化コミュニケーションの分野で「社会語用論的失敗」に関する研究が進む一方、「語用言語学的失敗」についての研究は十分とは言えない。その理由の一つとして、①研究対象が膨大である②語用論的記述自体が非常に難しい③記述を学習者に有効な形で提示することが難しい、等が挙げられる。だからといって、手をこまねいていてはいけないだろう。例えば、アルバイト先への病欠の連絡で（4）「風邪を引いたんですから休みます」と言ってしまうような誤用が上級者に見られるのも、「ンデスカラ文」の持つ「含み」を把握していないことから起きる失敗である。滞日歴が長い学習者にも（4）のような「ノダ文」が見られることをひとつ取ってもわかるように、目標言語の環

境に入れば自然に身につくからと放置してよいものではない。また、一般の日本語母語話者側の理解不足に責を負わせるのも問題解決方法として現実的でも理想的でもない[ix]。

さらに、本稿では、Bybee（1988）でも触れられているように[x]、文法形式の多義化が通言語的に似通った道筋をたどる場合があること、また、類似の文法形式の多義化が進んだ場合、意味用法の範囲の広さが、誤用や非用が生じるパターンと直接的に関係している可能性があることを主張する[xi]。母語の試行形式の意味用法が限定されているタイ語やクメール語母語話者は、母語からの「含み」の転移により V-テミル形式に抵抗感を持つため非用が目立ち、逆に、母語の試行形式の意味用法が目標言語の日本語よりも広く多岐にわたる韓国語母語話者は、日本語と母語との違いに気づきにくいため V-テミルの過剰使用が見られるという特徴がある。また、日本語母語話者（教師）は、韓国語母語話者の誤用には気づきやすいが、タイ語やクメール語母語話者が V-テミルついて持つ違和感や抵抗感については鈍感で、単に気がつかないだけでなく説明されても理解が難しい。これらの現象は一見異なるものに見えるが、類似形式の持つ意味範囲の狭い方が広い方に違和感を持ち、意味範囲の広い方は狭い方との違いに鈍感であるという点で共通しており、方言を含む第二言語習得における誤用や非用の問題を考える上で、広く認められる現象であると考える。

本稿では、第 2 節で、研究方法について説明し、第 3 節では、視覚動詞の文法化について、先行研究（嶋田 2007, Shibatani 2007,百留 2012）を紹介しながら本稿の立場を整理する。第 4 節では、試行形式における 4 言語の違いが「否定的な結果」への意識の違いであることを論じ、第 5 節では、V-テミルの個別の用法に関して、日本語学習者への聞き取り調査の結果について考察を行う。第 6 節では、まとめとして、母語の類似形式の意味用法の範囲の広さが、学習者の誤用や非用と密接に関わっていることについて論じる。

2. 研究方法

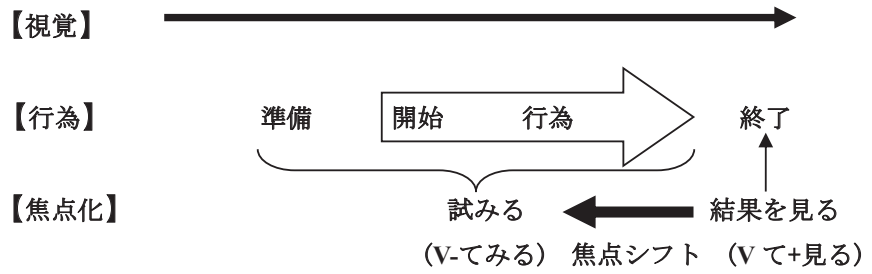
本研究では、V-テミル同様、視覚動詞を含む形式が《試行》の形式へと文法化を起こしている韓国語、タイ語、クメール語の母語話者である日本語学習者[xii]に、出現形式（及び、機能）別に取り出した V-テミルの用例に関して聞き取り調査を行うという方法で、学習者の使用実態、母語の類似形式と V-テミルの意味、用法、「含み」における違いに迫った。出現形式は、事前にドラマのシナリオ 8 作品により調査を行い抽出した 248 件の V-テミルの用例のうち、使用頻度の高い形式である「命令（指示）形」「意向形」「願望形」「タ形」を選択した。形式と機能が必ずしも 1 対 1 対応しているわけではないため、出現形式と機能の両方が重なるものを中心に論じる。必要に応じて、『名大会話コーパス』も参照した[xiii]。

質問は、次のようなものである。文脈を与えた出現形式の異なる V-テミル文の意味をどう解釈するか、その文脈で母語の類似形式を用いることができるか、使用するとすればその形式はどのような意味や「含み」を持つのか、学習者自身は日本語の V-テミル形式を同様の文脈で使っているか、使っていないとすれば理由は何か、等である。

3.「見る」の文法化：視覚動詞から《試行》、そして《経験》へ

V-テミルによる試行形式は、(5) 靴屋で「(合うかどうか) 履いてみてください」のような場合には必須とされ、基本的には、初めて行うことに対する未知の「結果への意識」が使用の前提とされる（金水 2004、須永 2007、嶋田 2007）。今回調査した韓国語・タイ語・クメール語のすべてで、(5) の内容を各言語の類似形式を使い自然に言える[xiv]。

では、なぜ視覚動詞が《試行》の意味を持つに至るのだろうか。V-テミルを例に考えてみる。認知言語学の立場から V-テミルの文法化を分析した嶋田（2007）によれば、「V て、見る」では、前件動詞 V と「見る」が《継起》的に連続していたのに対し、「V-テミル」で前件と後件がひとまとまりになると、前件Ｖと「見る」との間に時間差がなくなった。そこで焦点シフトが生じ、前件のＶに焦点が当たるようになると V-テミルに「意図的に何かを行い結果を見る」という《試行》の意味が生まれ、それが語用論的強化[xv]を経て「(ある結果を期待して) ある行為を試みに行う」ことを表す構文となったと説明される。「ある結果を期待して、ある行為を行う」というコンテクスト上から得られる推意が V-テミルに定着し、《試行》の意味機能を持つに到ったと考えるわけである。



（図１）　「メトニミー」（焦点シフト）による説明　（嶋田 2007）

この説明は、百留（2012）の上代中古における V-ミルの文法化に関する通時的研究の結果にも合致しており、文法化の道筋として説得力がある。百留（2012）によれば、上代の資料『万葉集』では、前件と後件が《継起》的である「出で見る」類、次に《付帯状況》の「笑み見る」類や《並列》の「逢ひ見る」類も見られるが、《試行》は見られない。中古資料になると、「誘ひ見る」等《試行》の意味を持つものが登場するようになると言う[xvi]。

嶋田（2007）は、V-テミルが文法化しているものとそうでないものの見分け方として、音声言語での小ポーズの有無（小ポーズが有る場合は文法化していない）の他、前件動詞 V と「見る」の意味的な関係を挙げる。

(6) a.目を開けてみる。(曖昧文：「見る」の意味が残っている読みと「試す」の読み)
　　b.目を閉じてみる。(「試す」読みのみ)　　(嶋田 2007 の用例)

「見るためにVする」意味関係がある場合（6a）は、V-テミルのミルに「見る」という本来の意味を残すため文脈や音声が無い場合は曖昧文になるが、Vが「見るための準備行為でないもの」(6b) は、《試行》の意味としてしか解釈できないと指摘している。百留 (2012) の研究においても、明記されてはいないが、V-ミルの文法化判断に同じ見分け方が用いられているとみてよい。前件動詞と後件「見る」の関係が「出で見る」《継起》、「笑み見る」《付帯状況》、「逢ひ見る」《並列》の場合は、「見る」に本来の視覚動詞の意味を認め、「誘ひ見る」のように視覚動詞「見る」とは意味的関連性がない動詞が前件の場合は、「見る」という解釈が不可能であるため、《試行》と解釈されている。

これはShibatani（2007）の“Semantically incongruous contexts facilitate grammaticalization”（拙訳：意味的に異質なコンテクストが文法化を促進する）という主張と意を同じくするもので、文法化を含む広く多義化を促進する原理だと考えられる。嶋田（2007）の説明にある「見るための準備行為でない」前件動詞は、Shibatani（2007）流に言えば、「ミルとは異質な意味を持つ動詞」と言い替えられる。

このShibatani（2007）の仮説は、テ形補助用言の通時的な文法化の進行の過程のみならず、共時的に文法化のレベルが異なるものが共存する現象もうまく説明できる。図2は、Shibatani（2007）が、テ形接続による動詞連続体において、文法化を推し進める促進力が前後の動詞の意味の組み合わせの「異質さ」であることをV-テクル/テイクを例に示したものである。例えば、「歩いてくる」は「Manner ＋ Motion」、「入ってくる」は、「Location change ＋ Motion」、「飲んでくる」は「Action ＋ Motion」という具合に、前後の動詞の意味の組み合わせにより、動詞連続体のとる項の格や否定のスコープが変化する等、文法的なふるまいが異なってくることを明らかにした。そして、母語話者は、共時的に存在する文法化レベルの異なるV-テクルによる動詞連続体の意味を問題なく使い分けているのである[xvii]。

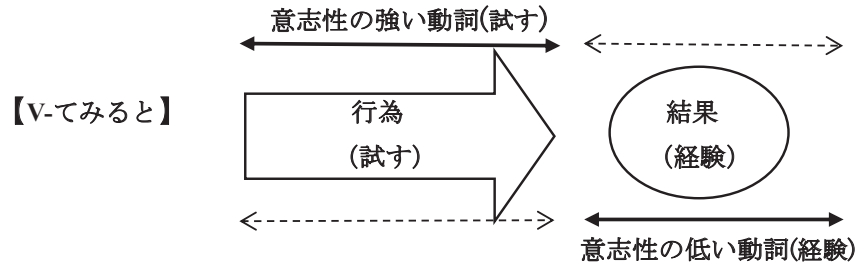
（図2）　Shibatani（2007）V-テクル

条件節におけるV-テミルの《経験》用法については、意志的Vとの組み合わせか、非意志的Vとの組み合わせかにより、形式の持つ意味が《試行》から《経験》へと変化するが、これについても、Shibatani（2007）の「前後の組み合わせの異質さ」によって説明ができるだろう。本来、ある結果を期待してある行為を試みに行う場合、行為Vは意図的な行為であり、それゆえ、Vには意志的な動詞が来る。そのV-テミルの形式が、非意図的な事象、

つまり、無意志的な V と組み合わさったとき、文法化が新たなステージへと促進されるのである。似たようなことは動詞と形容詞の複合形式である V-ヤスイの形式でも観察される。

(7)「バナナは食べやすい。」　「意志的 V」　「V するのは簡単だ」
(8)「湿度の高い日は熱中症が起こりやすい。」　「非意志的 V」「V する傾向がある」

V-テミルの場合は、非意志的な動詞と組み合わさったとき、《試行》から《経験》へと意味が変化する。これについて嶋田（2007）は、V-テミルが条件節等で、前件動詞に意志性の低い行為が来ると《経験》へと意味拡張するのは、《試行》と《経験》の隣接性によるものであると主張している。《試行》は行われると《経験》になるからである。



（図 3）条件節における V-テミルの文法化（V-テミルトを例に）（嶋田 2007）

この嶋田（2007）の仮説の傍証となるのが、韓国語における V-boda が持つ《経験》用法である。日本語においては《経験》用法は、「V てみると／みれば／みたら／みたところ」等の条件節や、テミロ条件命令文[xviii]でしか認められないが、韓国語においては、条件節以外でも《経験》用法が認められる。主節末での V-boda の過去のテンス形式「V-봤다（V-bwassda）等」や、《経験》を意味する形式である「V-ㄴ 적이 있다（V-n-jog-i issda）」に boda（見る）を組み合わせて「V- 본 적이 있다（V-bo-n-jog-i issda）」とし、《経験》を述べることができる。日本語でも、(9)「この本、読んでみました。おもしろかったです。」のように、過去の意図的な《試行》に限り、引き続き言及すべき「結果」の前置きとして主節での使用が可能だが、韓国語の場合はその V から生まれる直接的な「結果」に関する言及が談話内で後続せずとも使える《経験》を表す形式として使用することができる点で異なる。また、日本語では不自然な（10）「＃会社を首になってみた。」（11）「＃告白されてみた。」（12）「＃地下鉄ですりにあってみた（ことがある）。」のような非意図的な事象を表す V に接続する《経験》用法が認められる点で日本語と大きく異なる。また、意図的な V と結びついても、《経験》を表すことができるため、(13)「？韓国に｛行ってみましたか／行ってみたことありますか｝」のようなやや不自然な V-テミタの使用が韓国語母語話者に見られる。

試行形式の文法化について、本稿の研究対象である 4 言語についてまとめてみる。日本

語では条件節でだけ意志性制約が緩み《経験》用法が使用されるが、タイ語やクメール語の形式では条件節での使用も日本語ほど頻繁には見られない。《過去の試行》についての使用も、タイ語やクメール語では制限的で、主節では通常使用されない。それに対して、韓国語母語話者は、母語の類似形式 V-boda において《試行》から《経験》への文法化の流れが最も進んでおり、主節末においても、V-boda の過去の形式（V-bwassda 等）で《過去の試行》だけでなく《経験》を述べることもできる。4 言語の類似形式の対照により、《経験》への文法化が進んでいる言語ほど意味用法が拡張しているだけでなく、「否定的な結果」に対する意識が薄らいでいることがあきらかになった。これについては、第 4 節で詳述する。

4.　文法化と「否定的な（望ましくない）結果」への意識の違い

文法化においては、本来内容語であった語彙の意味の希薄化が進むことが指摘されているが（Sweetser 1990）、「見る」という原義が希薄化している点ではどの言語も同じである。では、いったい何が違っているのだろうか。調査していくうちに、これら言語間での試行形式の「含み」の違いは、それぞれの形式の持つ「結果への意識」の違いと深い関係があることがわかってきた。《試行》において意識される「結果」とは、(5) 靴屋で「履いてみてください」であれば、「靴が足に合う／合わない」「気に入る／気に入らない」、つまり、結果が望ましい場合とそうでない場合があり、このような「結果への意識」が試行形式に共通して見られる。一方で、どの言語でも同様の「結果」への意識があるわけではなく、クメール語、タイ語、日本語、韓国語の順に「否定的な（望ましくない）結果」への意識が薄れた用法が確認された。

クメール語	＞	タイ語	＞	日本語	＞	韓国語

強い　　⇔　　弱い

（図 4）　「否定的な結果」への意識

聞き取り調査によって、クメール語やタイ語の試行形式は、「初めて V するときに使う」という制限が日本語や韓国語より強いことがわかった。また、クメール語やタイ語の母語話者は、試行形式が使用された場合に「望ましくない結果が生じる可能性」を日本語や韓国語の母語話者よりも強く感じ取るという。初めて何かをするときは、経験済みの行為をするときに比べ、結果が不確実である。それゆえ、初めての《試行》の意味あいが強ければ強いほど、「否定的な結果」という「含み」が強くなる。V-テミルに関する先行研究でも「結果への意識」は言及されてきたが、それが「否定的な結果への意識」という意味で捉えられたことは管見の限りない。本稿では、この「否定的な結果への意識」の違いが、それぞれの形式の持つ「含み」の違いをもたらしていると考える。

また、第 3 節で見たように、試行形式が《経験》の意味用法を持つようになる（日本語においては、条件節での使用のみ）ことと、V の意志性制約が無くなることは、密接に関係している。クメール語やタイ語のように《経験》用法への拡張がない場合は、V の意志性制約は堅固である。《試行》は意図的に行われることだからである。

以上のことから、本稿においては、試行形式の文法化について、①「否定的な結果」への意識の希薄化②Ｖの意志性制約の緩和③過去のＶに使用できるかどうか（《試行》から《経験》への用法の拡張）の三つすべてが連動していると考える。表 1 では左から右へ文法化が進み意味用法の多義化が見られるが、詳細については第 5 節でみる。

（表 1）文法化比較クメール語 saːk -V- mə̀ːl・タイ語 lɔ̀ɔŋ -V- duu・V-テミル・韓国語 V-boda

	saːk -V- mə̀ːl	**lɔ̀ɔŋ -V- duu**	**V-テミル**	**V-boda**
結果への意識	否定的結果への意識が強い	結果の不確定性への意識が強い	肯定的結果への期待だけでも使用可	結果に対する意識がかなり薄い
V の意志性制約	条件節でのみ緩和	条件節でのみ緩和されるが、多用しない	条件節でのみ緩和	条件節でも主節でも制限が無い
主節での使用［過去］	逆接的な内容の後続文の前置きとしての使用のみ可	一般的に不使用．後続文の前置きとしての使用有り	過去の試行に対する結果への意識がある場合は使用 意志的 V のみ可	意志的 V のみならず無意志的 V に接続可 主節での経験用法が存在する

5. 聞き取り調査結果： 学習者の持つ「含み」

各言語の母語話者の V-テミルの出現形別、使用場面ごとの「含み」に対する理解に焦点を当て、上級以上の日本語学習者に聞き取り調査を行った。その結果、どの言語の母語話者も V-テミルの「含み」の理解に関して、無意識のうちに母語の類似形式の影響を受けていること、そして、それが V-テミルの誤用だけでなく非用にも影響を及ぼしていることがわかった。また、上級学習者でも来日するまで、或いは、来日してからも、母語と日本語の微妙な差異に気がついていない場合が多いこともわかった。クメール語やタイ語の母語話者が日本語母語話者からのインプットが増えるにつれ自然に違いに気づくようになるのに対して、韓国語母語話者の場合、滞日歴が 1 年~5 年でも、今回の調査を受けて初めて V-テミルと母語の類似形式 V-boda の間に相違点があることを知ったというインフォーマントも複数いた。これについては、第 6 節で再度触れる。

5.1 否定的な結果が気になる形式：命令・指示・依頼

ドラマシナリオから抽出した 248 件の V-テミル形式のうち、4 割近くが命令や指示、依

頼の場面で用いられていた。日本語の命令・指示・依頼の場面での言語使用に V-テミル形式が一定の役割を果たしている可能性がある[xix]。また、ぞんざいな物言いになるため学習者は避けるべきであり、日常的にあまり使用されないとして、日本語教育では肩身の狭い活用形としての「命令形」も、(14)「やれるもんならやってみろ」のような指示を意味しない修辞的な命令形、(15)「ばれてみろ、たいへんなことになる」のようなテミロ条件命令文[xx]で多く使われており、「V てみな（さい)」「V てみて（ください)」のような日本語の命令形式の中核をなす形式を含めると、用例全体の３割を占める。ここでは、これら、命令形式のうち、機能として「命令・指示・依頼」に関わるものだけを対象とした。

タイ語やクメール語では、初回の《試行》であるということが重要であり、結果の不確実性、つまり、期待通りではない「否定的な結果」を「含み」として強く持つということは既に触れた。例えば、(16) カラオケで友人に「歌ってみて」と言うのは、日本語では、結果に対する「期待感」が伝わるため必ずしも失礼にはならないと思われるが、[16.1] クメール語母語話者は V-テミル形式を使うことにかなりの抵抗感があると言う。クメール語 saːk-V-mə̀ːl は、聞き手の能力にかかわる話題では、「否定的な結果」に対する「含み」が聞き手に伝わるため、対等以上の聞き手に対しては使いにくい。[16.2]タイ語母語話者は、友人の歌を聞くのが初めてである、または、その曲を友人が歌うのは初めてである等、「初回」という条件がなければ違和感があると言う。友人がその歌を歌うのを聞いたことがあり上手であることを知っている場合であれば、単純な願望形式か依頼の形式をとるのが自然である。これは、母語の lɔɔŋ-V-duu が結果がわかりきっている場合には使用できないためであると思われる。一方、[16.3]日本語では「もう一回」等があれば、何回目でも (16) を使用できるのではないだろうか。[16.4]韓国語母語話者は、母語 V-boda の命令形の持つ緩衝機能をそのまま日本語に転移させ、日本語母語話者以上に多用する。命令形に接続する V-boda は、《試行》の意味が希薄化し、ヘッジとしての終助詞的な役割にまで文法化が進んでいることもあり[xxi]、初回である必要も「結果」が不確実である必要もない。さらに、V-boda には、次の (17) (18) (19) ような、日本語に直訳すると不自然な用法がある。次の (17) (18) (19) は、韓国語からの逐語訳である。

(17) 上司が用事の済んだ部下に「＃（持ち場に）行ってみて」
(18) 買い物中トイレに行く前に、友人に荷物を預けて「＃カバン、ちょっと持ってみて」
(19)「＃すぐ戻るから、ここにいてみて」

日本語では、許可の文脈であれば (17')「下がって（も）いいよ」のような許可の形式、依頼の場合は (18')「カバン、持って（い）てくれる?」(19')「ここで待って（い）てくれる?」等の授受表現を用いる方が適切かつ自然である。万一、韓国語母語話者が、このような場面で V-テミルを使用した場合は、意図せず聞き手（日本語母語話者）の気分を害する

事態を招くこともあるだろう[xxii]。

生越（1991）では、(18）ような文が日本語で不適格になることについて、V-テミルが「命令形で使われるのは、その動作を動作主体自身のために行う場合のようである」が、「V-boda にはそのような制約はない」としている。しかしながら、V-テミルの指示文も確認すべき「結果」さえあれば、誰の利益になるかは関係なく使用できる。例えば、話し手が恋人へのプレゼント選びに訪れた店で、恋人と背格好の似た妹にカバンを持たせて品定めをする場合であれば、(18”）「(妹に向かって）カバン、持ってみて」の使用が可能である。動作主である妹にはカバンを持つことから得られる直接的な利益はないが、持った「結果」を誰かが確認する状況があれば十分適格性を持つ文になり得るのである。この文脈のように、確認すべき「結果」がある文脈では、日本語でも「持ってみて」や「持ってみてくれる？」のように V-テミルを含む依頼の形式の方が自然である。

逆に、動作主体の利益になる行為あっても、(20) 席を勧める状況での「＃座ってみて（ください)」は奇妙である。 [20.1]日本語母語話者が聞き手の場合は、座り心地を確かめてほしい等、「座る」ことから直接的に得られる「結果」が想定されると解釈する可能性が高い。[20.2]それに対して、韓国語では、ちょっと座って話をしよう、という程度の結果の「含み」があれば V-boda が使える。この程度の軽微な差は、聞き流されてしまうことが多いためか、今回調査した韓国語母語話者のほとんどが、(20）のような場合の日韓の両形式の持つ「含み」の違いに気が付いていなかったばかりか、知らずに使っていたと思うと答えた。

（17）（18）（19）（20）のような用例で韓国語母語話者が度々V-テミルを使用するときに日本語母語話者が抱く違和感は、一見不可解に思えるクメール語母語話者やタイ語母語話者の（16）に対する違和感を説明してくれる。(16）における V-テミルの使用について、歌が下手かもしれないという「否定的な結果」を意識していない様子の日本語母語話者の使用態度に、クメール語母語話者は強い違和感を覚える。タイ語母語話者も初回でもない結果のわかりきった行為に対する V-テミルの使用に違和感を覚える。それは、ちょうど確認すべき結果が特に存在しない状況での韓国語母語話者の V-テミルの過剰使用 (17）(18）（19）（20）に日本語母語話者が違和感を覚えることと平行している。「否定的な結果」への意識の強い母語形式を持つ側が、薄れている母語形式を持つ側の試行形式に違和感を覚えるのに対し、薄れている側は違いに気がつきにくい状況があるとまとめることができる。

5.2　実現可能性を低める形式：意向形

意向形においては、様相がやや複雑である。日本語でも（21）「考えてみます」が婉曲な拒絶となることがしばしば指摘されるが、クメール語の類似形式 saːk-V-mə̀ːl では（21）のような婉曲的拒絶の「含み」が様々な動詞で広く表れるため、クメール語母語話者は、V-テミルでもいろいろな動詞の意向形で、拒絶を婉曲に表現できると考えてしまいがちである。(22）指導教授から論文を渡された学生が「読んでみます」と言った場合、クメール

語母語話者は、読む気があまりないことを婉曲に伝えたつもりであるが、日本語母語話者は必ずしも拒絶とは受け取ってくれない。[22.1]クメール語 sa:k-V-mə̀:l の意向形での使用は、通常、「読んでもどうせ私には難しすぎてわからないだろう」「その論文は役にたたないかもしれない」等の「否定的な結果」を含み、V に対する「やる気の無さ」を伝える。また、(22) の場合のように、やる気がないということが伝わると失礼になる場合は、クメール語では sa:k-V-mə̀:l の使用自体が避けられる[xxiii]。これに対して [22.2] V-テミルは (21) 等の慣用的な表現以外では、提案に対する婉曲な拒絶とまでは通常解釈されない[xxiv]。

さらに深刻なのは、日本語母語話者に頼みごとをされ、意向形の V-テミルを用いて婉曲的に断ったつもりが相手にその意図が伝達されない場合である。この場合、日本語母語話者はクメール語母語話者が約束を守らない人だと誤解し、対人関係の問題に発展しかねない。(23) 学園祭の準備物の買い物を頼まれたクメール語母語話者が「探しに行ってみます」と答えたとして、[23.1]クメール語母語話者は婉曲に断ったつもりの場合でも、[23.2]日本語母語話者は、結果についての保証はできないにせよ、一応は頼み事を引き受けたという意思表示であると解釈する。クメール語母語話者であれば、sa:k-V-mə̀:l を伴う回答を聞いた時点で、音調や文脈や表情から総合的に判断して拒絶だと思えばその人に頼むのは諦めるか、きちんと約束を取りつけるまで確認し続けると言う。このような齟齬は、依頼に対する断り方をめぐる社会文化的レベルの行き違いと受け取られがちであるが、実のところ、形式の持つ「含み」が共有されていないことから生じる語用言語学的な失敗例である可能性があるのである。

一方、[23.3]韓国語 V-boda の意向形は、(23) のような文脈では日本語とほぼ同様に解釈できるが、「含み」が完全に日本語と同じとは限らない。例えば、「gada（行く）」に boda がついた意向形の場合は《試行》の意味はなく、意向形の《丁寧》なバージョンであり、逐語訳の「行ってみます」ではなく「失礼します」のような意味で使用していると見られる[xxv]。なお、[23.4]タイ語母語話者は、「V てみます」に関して、①初回の試行であること②結果が不確実であることが前提でなければ使いにくいと感じるが、解釈自体は日本語に似ており、クメール語ほど結果に対して否定的な「含み」を持つわけではない。

5.3　実現性の低い願望を表す形式：V-テミタイ

V-テミルと願望形式 V-タイが融合した V-テミタイに関しても、5.1 や 5.2 と同様、韓国語母語話者が日本語の用法に抵抗がないのに対して、クメール語・タイ語母語話者は一様に違和感があり使いにくいと言う。クメール語ではそもそも願望形式に sa:k-V-mə̀:l を結合させることはなく、タイ語では、願望形式 yàak は単独で使用するのが普通で、試行形式と共起する場合は yàak＋lɔɔŋ（duu）となるが、頻度は高くない。興味深いことに、タイ語母語話者は、(24)「オリンピックに出てみたいな」と言うのにはあまり違和感はないが、(25)「オリンピックで金メダルを取ってみたいな」にはかなり抵抗があると言う。タイ語の

yàak＋lɔɔŋ（duu）は（24）には使用でき、（25）には使用できないからという理由である。日本語母語話者にとっては、（24）と（25）の差異はわずかで、どちらも特別な運動選手でない限り非現実的な願望であるが、タイ語の試行形式の使用においては、「オリンピックに出る」と「金メダルを取る」の間に歴然とした境界線が存在する。「金メダルを取った」場合、その結果は肯定的であると予想される。そのため、望ましくない結果の可能性を「含み」として持つ試行形式を（25）に使用するのは不自然ということになる。それに対して、（24）であれば、試合で負けるかもしれないという可能性の余地があるため許容できる。ここでも[25.1]期待感さえあれば V-テミルが使用できる日本語と、[25.2]結果の不確実性が「含み」としてなければ使用しにくいタイ語 lɔɔŋ-V-duu との違いをみることができる。

さらに、クメール語とタイ語母語話者の聞き取りから興味深いことがわかった。日本語母語話者は、実現性の低い願望を述べるときに、V-タイよりも V-テミタイを好んで使用していると言うのである。例えば、タイ語母語話者は、日本語母語話者の（26）「バンコクに行ってみたい」のような発話を真に受けて、[26.1]「いつ行くの？案内しようか？」と聞き返してしまうことがよくあると言う。そのような相槌に日本語母語話者が戸惑いを見せることから、V-テミタイによって表現された願望は本気ではないと学習者は悟るのだと言う。

この件に関して、ドラマシナリオや『名大会話コーパス』から V-タイと V-テミタイを取り出して比較をしてみた。V-テミタイは必ずしも実現性の低い願望にだけ使用されているわけではない。また、V-テミタイに限らず、日本語の願望形式 V-タイ自体が、クメール語やタイ語の願望形式に比べ、「本気度が低い」ことを「含み」として持つ形式であるという可能性もある。但し、実現性のかなり低いもの、冗談半分で言っている場合、さらに、実現不可能な願望を述べる際には V-タイよりも V-テミタイが好んで使用されているということは言えるようである。

（27）長男が道でホストクラブのスカウトマンに声をかけられたという話を聞いた母親が食卓で 3 人の息子を前にして言う冗談（経済的状況から願望内容の実現は難しい）：
「私さ、一度でいいから（ホストクラブに）行ってみたいのよね」『ブラザービースト』

（27）は、V-タイに替えても適格性に決定的な問題が生じるわけではなく、V-タイと V-テミタイの境界線は曖昧である。しかし、「一度でいいから」という実現性の低さを表す修飾句を除くと、どうだろうか。（27’）「私さ、ホストクラブに｛行きたい／行ってみたい｝のよね」の場合、音調や表情の影響が解釈を左右するとは言え、「行きたいのよね」の方が、「行ってみたいのよね」よりも、本気だと受け取られやすいのではないだろうか。

次に、実現不可能な願望の場合（28）を見てみよう。

（28）松五郎という芸能人と高校の同級生だったというお嬢様に対して、執事が言う：
「私もぜひ高校時代の松五郎を拝見してみたいものでございますね。」
『謎解きはディナーの後で』

ドラマの前後の状況から判断するに、松五郎の高校時代の写真や映像を見たいという意味ではない。そのため、高校時代の松五郎を見るというのは、タイムマシンでも使わない限り実現不可能な願望である。このような非現実的な願望を表現する場合には、V-タイよりも V-テミタイ[xxvi]の方が自然である。

5.4　《試行》の結果についての言及が続く形式：V-テミタ（タ形）

過去のテンスでの使用は、(1)（2）の英語 tried to V との対照で見たように言語によって試行形式の使用に大きな差異が見られる点で興味深い。クメール語やタイ語では、過去のできごとに関して試行形式を使用すること自体が稀であるため、V-テミタを使いにくいと感じる。一方、他の形式では意味用法の差異が比較的小さい韓国語 V-boda が、重なりながらも日本語の V-テミルと大きく異なるのが過去の出来事を述べる際の V-boda 形式の使用であり、その結果、V-テミタは韓国語母語話者の誤用が最も目立つ形式となる。

（29）帰宅した子供に母親が「先生に相談してみた？」と尋ねるような場合、[29.1] クメール語やタイ語では単純な過去の形式が一般的であるため、学習者の V-テミタの非用が目立つ一方、[29.2] 韓国語母語話者は違和感を持たず多用する。だからといって、韓国語母語話者が日本語と同様の「含み」を持って V-テミタを使っているとは限らない。V-boda の過去のことがらに関する使用は《試行》から《経験》まで意味の幅が広く、特に結果の不確定性が想定される《試行》の意味を持たない状況でも使用できる。韓国語の場合、ニュース番組のアンカーが記者に取材内容の説明を促すときに、(30)「逐語訳：（作家に）取材してみたそうですね。」[xxvii]や（31）「逐語訳：〇〇記者が街頭で市民の声を聞いてみました。」[xxviii]のような V-boda の使用が見られるが、日本語であれば、単純なタ形や V-テキタを使うのが普通だろう。

（32）子供が「今日、先生に（成績のこと）相談してみた。」と切り出す場面では、[32.1] 日本語では、話の続き、つまり教師に相談した「結果」を聞くという談話の流れが生まれる。必ずしも話し手が続きを述べる必要はないが、談話全体では V の結果への言及が継続する必要があるため、話し手が続けない場合は、「で、どうだったの？」のように、聞き手が続きを促す相槌を打つ必要が生じる。また、(33)「〇〇を歌ってみた」(34)「△△を弾いてみた」のように V-テミタが投稿動画や記事のタイトルとして使用され、《試行》の結果を披露する場合の形式として定着し、投稿ジャンルになっていること[xxix]からも、V-テミタ形式の持つ《過去の試行》の結果が継起するという「含み」が確認できる。これに対して、[32.2]韓国語 V-boda では、《経験》用法の場合は、必ずしも「結果」への言及を伴わな

い。一方、過去のできごとに試行形式をあまり使わないクメール語とタイ語では、意志的な V であっても、単独で主節終わりに試行形式を使用することが難しい。[32.3]クメール語では、saːk-V-mɔ̀ːl が完了した V に使用される場合は、聞き手は望ましくない結果を予想し、話し手は引き続き結果を最後まで述べる必要がある。 [32.4] これは、タイ語 lɔɔŋ-V-duu でも同様で、V が意志的で《試行》の結果を述べる文が継起する場合に限り、前置きとしての使用が認められる。このため、クメール語母語話者もタイ語母語話者も（32’）「今日、先生に相談してみた。でも、今の成績では進級は難しいと言われた。」のように、結果報告の文が続けば、V-テミタも違和感なく使用することができると言う。なお、タイ語母語話者は、（32”）「今日、先生に相談してみた。進級できると言われた。」のように肯定的な結果が続いても違和感がない。クメール語に比べ、タイ語は「否定的な結果」への意識が弱いためであろう。

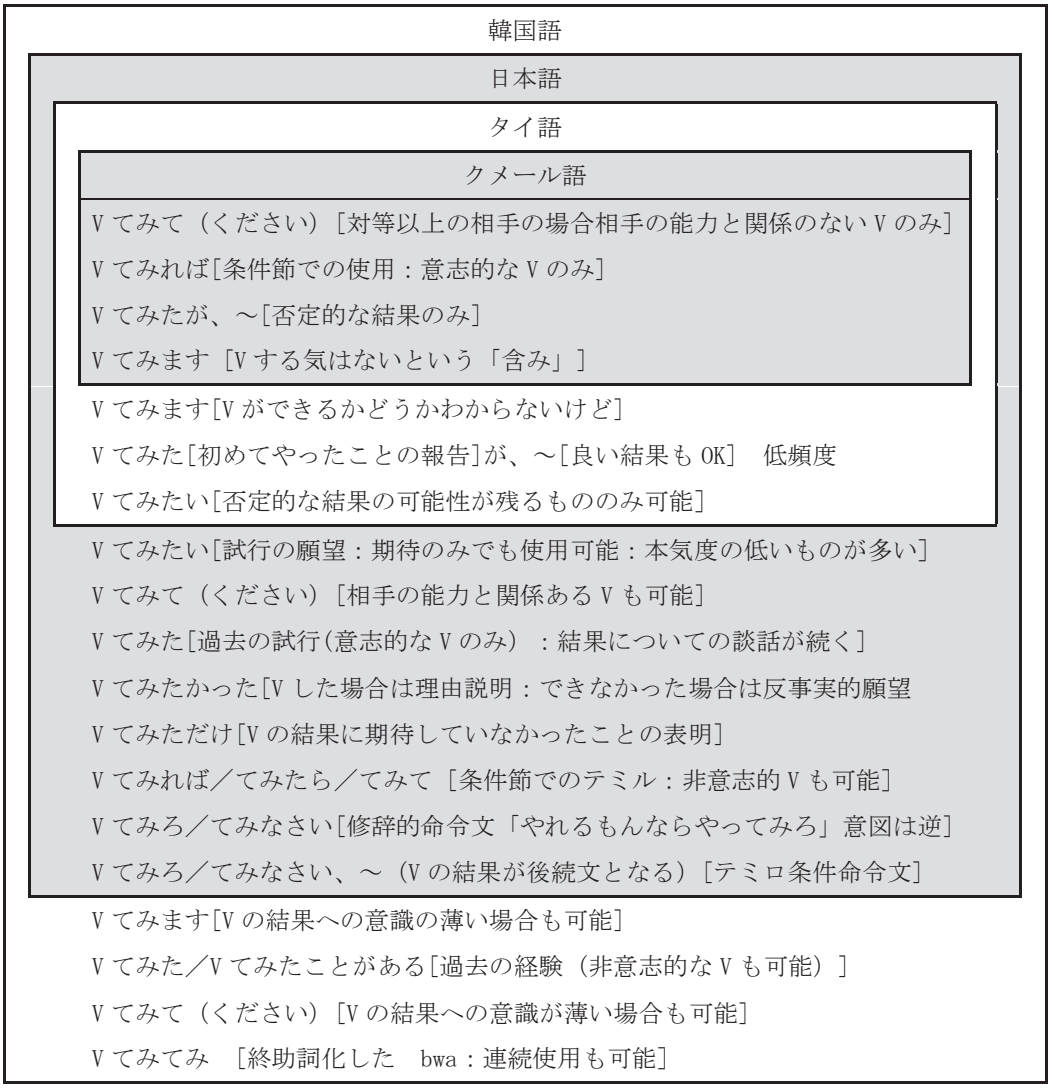
こうしてみると、日本語と韓国語に共通して主節における過去の出来事への試行形式の使用があること（用法の重なり）が、韓国語母語話者が V-boda の過去形と V-テミタの「含み」の違いに気づきにくい原因のひとつであると思われる。V-boda の過去の形式は、主節においても意志性制約がないため、V-テミタ形式の使用において母語に存在する《経験》用法を転移するという誤用が韓国語母語話者に多く見られる。特に、（35）「留学し｛てみましたか／てみたことありますか｝？」のような《経験》を表す形式の過剰使用が問題になることもある。［35.1］韓国語母語話者は単純に経験を尋ねているつもりであるのに、［35.2］日本語母語話者の耳には、「するべきなのにどうしてしていないのか」のような詰問調に聞こえてしまうためである。（36）「大学 1 年生のとき、失恋してみました／失恋してみたことがあります。」のような非意図的な V の用例（10）（11）（12）では明らかな誤用となるため指摘される可能性が高いが、（35）のような意志的な V の場合は誤用だと気づかれにくいだけに厄介である。

これら各言語の母語話者が抱く V-テミタの「含み」の違いも、母語の形式の持つ「結果への意識」の転移という観点から見ると整理できる（図 4 参照）。クメール語では、tried to V のように望ましくない結果が継起する必要があり、タイ語や日本語では《試行》の結果への言及の前置きとなる。また、クメール語・タイ語に比べ、日本語では過去のできごとについて試行形式を使う頻度が高いが、その日本語以上に試行形式を過去のテンスで試行形式を使用するのが韓国語である。韓国語の《経験》用法はできごとには言及するが、その結果がどうであったかについては必ずしも言及する必要がないという点で「結果への意識」が薄い。それに対し、主節における日本語の V-テミタはあくまでも《試行》の用法であり、「試行の結果」がなんらかの形で談話上、継起しなければならない。

以上、各言語の試行形式の用法の持つ含みの違いについて、「（否定的な）結果への意識」をキーワードに見てきた。「否定的な結果への意識」がどの言語の試行形式にもある程度共通して存在すること、そして、その度合いが異なることと用法の広がりとの関係を見た。

6. まとめ：気づきにくさの要因

最後に、本稿のまとめとして、類似形式の持つ意味範囲の狭い方が広い方に違和感を持ち、意味範囲の広い方は狭い方との違いに気がつかないという現象が見られることについて触れる。図 5 は、便宜上 V-テミルの出現形（と用法）を用いて、4 言語を対照させたものである。第 5 節で触れなかった出現形式も入れた。意味用法が広い言語は狭い言語に存在する用法を持っており、重なりながらも少しずつ異なりを見せる入れ子型構造になる。これら 4 言語の視覚動詞の文法化の例は、類似の文法形式の多義化の過程が通言語的であるケースであると言えよう。



（図 5）クメール語 saːk -V- məːl・タイ語 lɔɔŋ -V- duu・韓国語 V-boda の使用範囲を便宜上 V-テミルを基準に対照させたもの

本稿では、これまで指摘されることが少なかった V-テミルをめぐる学習者と日本語母語話者のズレに焦点をあて、それが各言語の試行形式の持つ「含み」、つまり、「結果への意識」の違いが転移されることによって引き起こされていることを指摘した。4 言語を対照することにより、学習者の母語と目標言語の 2 言語のみを対照させる研究では見えなかったことが明らかになったと考える。クメール語やタイ語母語話者が V-テミル形式に違和感を覚えるのとは対照的に、韓国語母語話者は上級者でも日韓の試行形式の相違点に気がついていない場合が多い。この事実は、母語の類似形式の意味範囲が目標言語のそれより狭い場合は違いに気づきやすく、逆に、広い場合は違いに気づきにくいことを示唆する。

このような現象は、方言を含む第二言語習得における誤用や非用の問題を考える際に、共通して見られるのではないかと思われる。例えば、日本語の V-テイルは、韓国語の類似形式「V-고 있다（V-go-issda）」に比べ使用範囲が広い。日本語母語話者に韓国語を教えている韓国語母語話者によれば、日本語母語話者は上級者でも「V-고 있다（V-go-issda）」の過剰使用が見られる。韓国語母語話者（教師）側は、日本語母語話者（学習者）の「V-고 있다（V-go-issda）」の誤用には敏感であるが、学習者（日本語母語話者）は指摘されるまで気がつかないことが多い。現象としては、V-テミルと V-boda の関係と同様のことがちょうど日韓で逆転して起きているとみてよい。

沖（1996）は、京阪方言の（36）「（私は遅れるので）さき食べかけといて」や（37）「（私後で行くので）さき、行きかけて」のような「動作・変化が展開の様相に入っている」V カケルの用法が方言であることに、当の京阪方言話者が気づいていないことを指摘した。メディアから流れる標準的な日本語を理解できるはずの現代の京阪方言話者が（36）や（37）が方言であることに気づかないのは偶然ではない。（36）や（37）のような京阪方言の「V かける」の用法が標準語では使用されない一方で、標準語における「本格的な動作・変化の手前に止まっている」用法（例：（38）「言いかけてやめる」（39）「プールで溺れかけた」（40）「あやうく死にかけた」）は京阪方言話者も使用している。目標言語にあって母語にない用法には気づきやすいが、母語にある用法が目標言語にない事実には気がつきにくいのである。結果として、京阪方言話者は、（36）や（37）を方言と知らずに使用し、他地域の人から指摘されて初めて方言であることに気づくことになる。逆に、例えば、東京方言を母語とする人が関西に移住して、この用法に気がつくのは比較的簡単である。しかし、東京方言話者がこの京阪方言の用法を自ら使いこなせるようになるには、多少の時間と慣れが必要であると推測される。母語（東京方言）の類似形式の意味用法が目標言語（京阪方言）のそれに比べ狭いため、母語と異なる用法である（36）や（37）に対しては、抵抗感や違和感を克服するのに時間がかかると考えられるからである。こうしてみると、クメール語やタイ語の母語話者が上級になっても V-テミルに対する抵抗感や違和感があるため使用が進まず、非用が目立つことに関して、実感を持って理解していただけるだろう。

目標言語の文法形式について母語の負の転移が起きやすい状況を、沖（1996）を参考に

整理してみた。①と②は沖（1996）の気づかれにくい方言についてのまとめを広く第二言語習得の状況に言い換えたものである。③は本稿の調査結果から導き出した仮説である。

①目標言語でも使われ、学習者の母語でも類似形式が存在する。
②母語の類似形式が、目標言語の形式と意味用法が重なりながらも、ずれている。
③母語の類似形式が、目標言語の形式より意味用法において狭い場合は非用につながりやすく、広い場合は目標言語の形式との違いに気がつきにくく過剰使用や誤用が目立つ。

【参考文献】（アルファベット順）

Bybee, Joan. L. (1988) Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Soceity*, pp.247-264.

百留康晴（2012）「上代中古における『～見る』」『国語教育論叢』21, pp.157-167. 島根大学教育学部国文学会

庵功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方１』くろしお出版

金谷由美子（2018）「漢語サ変動詞のボイスに関する一考察」日本語／日本語教育研究会（編）『日本語／日本語教育研究』9、ココ出版、pp.135－150.

菊地康人（2006）「受難の『んです』を救えるか」『月刊言語』35-12、大修館書店 pp.6-7.

菊田千春（2011）「複合動詞テミルの非意志的用法の成立 ： 語用論的強化の観点から」『日本語文法』11(2)、pp.43-59.

金水敏（2004）「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・他（編）『日本語の分析と言語類型：柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版、pp.47-56.

生越直樹（1991）「朝鮮語어보다と日本語『てみる』」『日本語学』Vol.10.12、明治書院、pp.90－101.

沖裕子（1996）「アスペクト形式『しかける・しておく』の意味の東西差－気づかれにくい方言について－」平山輝男博士米寿記念会（編）『日本語研究諸領域の視点（上巻）』、明治書院、pp.30-45.

斎藤純男、田口義久、西村義樹（編）（2015）『明解言語学辞典』三省堂

迫田久美子（2001）「第１章　学習者独自の文法」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子（編）『日本語学習者の文法習得』大修館書店、pp.3-23.

嶋田紀之（2007）「『V てみる』の多義性と文法化」東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻 2007 年度修士論文.

Shibatani, Masayoshi（2007）Grammaticalization of motion verbs. B. Frellesvig, M. Shibatani, and J.C.Smith (eds.) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*. Tokyo: Kuroshio Publishers. pp.107-133.

清水崇文（2009）『中間言語語用論概論－第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教

育』スリーエーネットワーク
須永哲矢（2007）「してみる形の意味」『日本語学論集』第 3 号、東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室、pp.92-105.
Sweetser, Eve E.（1990）*From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure.* Cambridge University Press.
Thomas, Jenny（1983）Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4(2), pp.91-112
Traugott, Elizabeth Closs. (1988) Pragmatic Strengthening and Grammaticalization. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 406-416.
山崎雅人（2017）「アルタイ諸語、朝鮮語と日本語における視覚動詞の試行相文法化の展開」『言語処理学会第 23 回年次大会発表論文集』pp.70-73.
張麟声（2011）『中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社

【参考書・教科書】

文化外国語専門学校編著（2000）『新文化初級日本語Ⅱ』文化外国語専門学校
市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
庵功雄・松岡弘・中西久実子・山田敏弘・高梨信乃　（2000）松岡弘（監修）『初級を教える人のための日本語文法ハンド ブック』スリーエーネットワーク
海外技術者研修協会編著（1993）『新日本語の基礎 II』スリーエーネットワーク
岡本牧子、沢田幸子、安田乙世（2009）『はじめて日本語を教える人のためのなっとく・知っとく初級文型 50』スリーエーネットワーク
スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ』スリーエーネットワーク
東京外国語大学日本語教育編著（2010）『初級日本語･上』凡人社
山﨑佳子、他（2009）、『日本語初級大地 2』スリーエーネットワーク

【日本語用例】

国立国語研究所『中納言：名大会話コーパス』

TV ドラマ（放送年順）

脚本	放送年	タイトル	放送局
北川悦吏子	1996	ロングバケーション	フジテレビ
秦建日子	2005	ドラゴン桜	TBS
小松江里子	2005	ブラザービート	TBS
衛藤凜	2006	のだめカンタービレ	フジテレビ
古家和尚	2007	LIAR GAME season 1	フジテレビ
黒岩勉	2011	謎解きはディナーの後で	フジテレビ
八津弘幸	2013	半沢直樹	TBS
池田奈津子	2015	アルジャーノンに花束を	TBS

【註】

[i] I tried *chou doufu*… であれば、少なくとも少しは食べたと解釈できる。
[ii] 形式の意味とは関係なく聞き手に解釈される「含意」（例：食事に誘われたときに「明日試験がある」ことを伝えると断りとして解釈される場合）ではないため、「形式の持つ含み」とした。管見の限り適当な専門用語が見当たらない。会話の推論（conversational inference）がコード化へ向かう過程については、Traugott（1998）等に言及がある。
[iii] 参考文献にある初級テキスト、日本語教育用の参考書で V-テミルの取り扱いを調べた。また、聞き取り調査を行った学習者に確認を取った。
[iv] 本稿では、文法化を「具体的な意味を持つ開いた類に属する語彙的な要素が、抽象的な意味を持つ閉じた類に属する文法的な要素に変化する現象」（「明解言語学辞典」より）とする。
[v] 誤用が起きる原因はいろいろな要因が絡みあっており、母語の影響であると断定することは難しいが、母語の影響がないと断定することもまた難しい。学習者に共通に表れる習得順序を扱った研究（迫田 2001）でも、詳細にみると母語の負の転移を完全に排除できるものではないことが張麟声（2011）で指摘されている。複数の言語の母語話者が同様の誤用をすることをもって、安易に母語の影響がないとするのは問題である。金谷（2018）では、漢語ボイス接辞選択において、中国語・韓国語母語話者に共通に表れる誤用（*戦後日本はとても発展<u>された</u>）も、実は母語の転移によるものであり、母語が中国語・韓国語でそれぞれ原因が異なることを指摘した。
[vi] 訳語は清水（2009）による。
[vii] Pragma-linguistic failure may arise from two identifiable sources: 'teaching-induced errors' and 'pragma-linguistic transfer—the inappropriate transfer of speech act strategies from one language to another, or the transferring from the mother tongue to the target language of utterances which are semantically/syntactically equivalent, but which, because of different 'interpretive bias', tend to convey a different pragmatic force in the target language. (Thomas,1983: p.101)
[viii] 例えば、アルバイト先に大幅に遅刻した場合に、まず謝罪するといった日本的な慣習を知らない日本語学習者が、母語における言語行動のまま、長々と遅刻理由を述べることによって事態を悪化させてしまうような場合が考えられる。
[ix] ノダ文を教えることの難しさと必要性については、菊地（2006）を参照されたい。
[x] “similarities may be found both in the lexical sources for grammatical morphemes and in the grammatical meanings that eventually develop.” Bybee(1988)
[xi] Thomas(1983)でも、母語の特定の形式が、目標言語で様々な形式に翻訳可能な場合に、母語の負の転移による誤用が起きる傾向にあることが指摘されているが、丁寧でない依頼形式を固定的に使用する学習者の例などの誤用例を挙げており、本稿で V-テミルを例に説明しようとしていることとはかなり異なるようである。
[xii] 聞き取りの対象となったタイ語とクメール語の母語話者は、全員大阪大学の留学生である。韓国語母語話者は、日本語学習歴のある語学学校講師で留学生も含まれる。
[xiii] 本研究では、自然会話コーパスの利用は参考程度にとどめている。自然会話コーパスは、実際の言語使用に即した研究ができる点では優れているが、語用論的な意味を重視する本稿のような研究目的の場合、文脈がよくわからないという決定的な欠点を持つと考える。
[xiv] 山崎（2017）によれば、視覚動詞が試行形式になる例は、日本語ほか、韓国語、カザフ語、キルギス語、モンゴル語、満州文語、アイヌ語、中国語、ビルマ語、タイ語、ラーオ語、ベトナム語等アジアの言語に多く例が見られると言う。
[xv] 嶋田（2007）によれば、語用論的強化とは、「ある表現のある状況での語用論的解釈が、歴史的経過を経て、その表現の意味に組み込まれていくことを言う。発話参与者の語用論レベルでの「推論」が語義レベルまで慣習化・定着化したもの」である。
[xvi] 百留（2012）は、《試行》であるという断定は避けている。また、V-ミルと V-テミルが

連続しているかどうかについては、嶋田（2007）、菊田（2011）、百留（2012）のすべてが慎重であるべきだとしているが、V-テミルの多義化と平行する現象として V-ミルの文法化についての研究が参考になると考え言及した。

[xvii] 前件も後件も同じ動詞であるひとつの動詞連続形式が多義化し、後件動詞の文法化のレベルが異なる場合（書き出す：①必要な個所を抜き出して書く②書き始める）や、語彙化し、不透明な意味を持つ形式（返り見る→顧みる）等、動詞連続体の前件・後件動詞の関係は複雑であるが、ここではこれ以上立ち入らない。

[xviii] テミロ条件命令文については、菊田（2011 他）に詳しい。

[xix] 命令文の研究者である牧野由紀子氏からも指摘をいただいた。

[xx] テミロ条件命令文は、命令形自体が日本語教育では産出させる必要がない項目とされていることもあり、上級の段階になっても教えられていないようである。ところが、Vテミロではなく、「Vてみな（さい）、～」等、あまり乱暴には聞こえない命令の形態を含め、シナリオではかなり使用されている（「あんなものが表に出てみろ。伊勢島だけじゃない、うちの銀行も吹っ飛ぶぞ」『半沢直樹』第 7 話より）。タイ語・クメール語には類似の形式がないため非用が問題となるが、韓国語ではまったく同じ用法が V-boda に存在するため、教えられなくても自然に解釈ができるようになるようである。

[xxi] クメール語の試行形式には mə̀:l 単独の形式で接辞尾化した結果への意識の薄いものあり，その形式であれば，韓国語同様（16）のような場面での使用が可能であるが，聞き手の能力にかかわることには使いにくいという特徴は残る。

[xxii] 中には、日本語母語話者から指摘を受けたことがあるという韓国語母語話者もいた。

[xxiii] （22）の場合、実際のクメール語では、指導教授の助言に対してやる気がないということを伝えると失礼になるため sa:k-V-mə̀:l の使用自体が避けられるが、V-テミルの使用は自然な状況であり、クメール語母語話者である留学生からこのような「含み」があることを聞いた教授（日本語母語話者）が驚いたというエピソードもあったため敢えて使用した。

[xxiv] 日本語でも、何かを勧められた際に V-テミルの意向形を使用する場合は、テミルがない意向形に比べ、結果の不確実性から「実現性が低い」とみることができるが、クメール語のように、「拒絶」を「含み」として持ち、多くの文脈でそれが聞き手に解釈されることが期待されるとまでは言えない。

[xxv] 「結果への意識」が非常に薄い V-boda の意向形の例「먼저 가보겠습니다（逐語訳：行ってみます）」は、謙譲語的な表現であり、山崎（2017）等で度々指摘されている。

[xxvi] 「V-たかった／V-てみたかった」の対立も興味深いが、ここでは、タイ語との対比が可能な V-タイと V-テミタイの境界に議論を絞る。

[xxvii] ニュースアンカーから日本特派員へ “우리 쪽 작가나 기획자들의 생각이 궁금한데, 취재를 해봤다면서요.” SBS 8 뉴스 2019. 8. 3 放送（但し、HP では “하셨다고요”に修正）
https://news.sbs.co.kr/news/endPage.do?news_id=N1005381037&plink=THUMB&cooper=SBSNEWSPROGRAM&plink=COPYPASTE&cooper=SBSNEWSEND（2019 年 8 月 7 日最終閲覧日）

[xxviii] “엄민재기자가 거리에서 시민들의 의견을 들어봤습니다.” SBS 8 뉴스 2019. 8. 3 放送

[xxix] 大阪大学大学院生橋本凜氏の指摘による。

【付記・謝辞】
本稿は、大阪大学言語文化研究科日本語日本文化専攻の筒井佐代教授の授業でのグループワークから出発し、第 42 回社会言語科学会（2018 年 9 月 22 日於広島大学）で口頭発表したものに修正を加えたものです。会場で貴重なコメントをくださった先生方、助言をくださった大阪大学の先生方と大学院生の皆様、共同執筆者兼インフォーマントの三名、タイ語と韓国語のインフォーマントの皆様にお礼申し上げます。（ラッタナポンピンヨ・プラッチャヤポーン、アッタイエム・タナポン、カンジャマーポンクン・サティダー、プリーチャーパンヤー・シャヤーポーン・金吉任・朴正薫・李다예・李雄輝・李香怜・崔鎮享・具보람・金여름・朴銀淑・盧東鉄・魯堯烘・徐燦赫・文世煥・金昇乎・具明勲・郭泰熏）